

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	宮田 敏之
論文題目	戦前期タイ米経済の発展と構造 —タイ米の「品質」をめぐる一考察—		
(論文内容の要旨)			
<p>戦前期の資料では、タイ米が他の東南アジア産の米よりも品質がよく、それゆえ高い価格で取引されていたことを確認できる。本論文は高品質の「ガーデン・ライス」と呼ばれた米に光を当て、輸出向け米の貿易統計を規格別に再整理し、戦前期タイの米輸出経済発展の要因について、タイ米の品質という点から検討を試みた。</p> <p>第1章では、戦前期タイ米経済の発展を、時系列に沿って検証する。19世紀後半、アジア間貿易の発展にともない、香港やシンガポールを中継基地とする東アジアや東南アジアの米需要が拡大した。それに対応する形で、タイではチャオプラヤー・デルタを中心に米生産が増大し、米輸出が急速に伸びたことを整理した。さらに、タイの米輸出の拡大の背景には、ガーデン・ライスとして流通した移植米がその品質ゆえに海外市場で高く評価され、相対的に高い価格で取引されたという事情があったことも明らかにした。</p> <p>第2章では、戦前期におけるタイ米の輸出経済を分析する上での基礎資料たるタイの外国貿易統計の特徴とその変遷、さらに外国貿易統計を作成した関税局の歴史を検証した。</p> <p>第3章では、タイのガーデン・ライスの精米や輸出に関わったとされる陳金鐘 (Tan Kim Ching) のバンコクとシンガポールを結ぶ米のビジネスを検証した。陳金鐘は、シンガポールを本拠とする福建系華僑商人であるが、1870年代には、バンコクに精米所と米輸出商社を設立し、バンコクの米業界では「白米の精米業の先駆者」として知られた存在となり、一等白米 (No.1 White Rice)、すなわち、主としてガーデン・ライスとみなされる米の精米とその輸出を行っていた。</p> <p>第4章では、タイ米の欧州向けの輸出が停止するという1920年代末の異常事態に着目し、その要因を検証する。欧州向け米輸出の停止は、欧州系米輸出商社と華僑系精米所との間で、タイ米の品質低下の要因をめぐる対立が引き金となった。この時の米の品質は、米の品種の違いや農学的な成分の劣化ではなく、契約していた規格とは異なる輸出米の内容 (白米と碎米の混合比率の違い) という意味での品質の低下であった。こうした欧州向け米輸出の停止が物語るのは、品質が高く評価されたタイ米の取引では、その品質の維持が極めて重要であったということであった。</p> <p>第5章では、19世紀後半から20世紀初頭のタイにおける土地法制定の背景、および地券交付とその影響を検証した。ランシット地域以外のデルタでは、大土地所有制が発達せず、タイの農民は、水利、土壌、地形などの自然環境に応じて、稲の品種を選択</p>			

し、稲の栽培方法を自らの判断で対応しうる余地があった。こうした「小規模の独立した農民」による稲作が行われた背景として、地券交付を目的とした土地法の制定が20世紀初頭まで遅れ、その結果、土地の商品化が進まず、大土地所有制が拡大しなかった点に注目した。

最後に、ガーデン・ライスの輸出が可能となった背景と要因として、戦前期においてタイ政府が、米の生産・流通・精米・輸出について、過度の管理や介入をせず、その結果、農民、流通業者、精米業者、輸出業者が、自由な選択や自由な競争の下で、米の生産や米のビジネスに従事することができた点が重要であることを指摘した。